幼児教育における指導計画作成についての試み
－自然とかかわる体験を通して－

An Attempt to Create Teaching Plans in Preschool Education
－Through Experiences Related to Nature－

吉田　香代子
YOSHIDA Kayoko

キーワード：指導計画立案，実体験，植物栽培，カリキュラム，保育内容「環境」
Key Words : Guidance Planning, Real Experience, Cultivation, Curriculum, Contents of Childcare (Environment)

1. はじめに

幼児教育は，環境を通して行う教育である．「幼稚園教育要領」には「幼児期の教育においては，幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め，自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら，様々な活動を展開し，充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければしてならない」[1] とある．また，「幼稚園おいてはこのことを踏まえ，幼児期にふさわしい生活が展開され，適切な指導が行われるよう，それぞれの幼稚園の教育課程に基づき，調和のとれた組織的，発展的な指導計画を作成し，幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない」[2] とある．

奈良佐保短期大学（以下，本学）地域こども学科では，1 回生前期に全員必修の「カリキュラム論」の授業において，指導計画立案に取り組む．「幼稚園教育要領」に「幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い，常に指導計画の改善を図るものとする」[3] とあるように指導計画の立案には，幼児を取り巻く環境や発達の段階での興味や関心をとらえ，遊びの展開を予想してなければならない．しかし，1 回生前期にはまだ学外実習に行っておらず，幼児に関わった経験が少ないことから，それをイメージすることが難しく，指導計画の立案が難しいと感じている学生も多く見受けられる．

また，1 回生後期に受講する必修科目の「保育内容『環境』」で学習する「環境」は，身近な環境との関わりに関する領域であり，この「身近な環境」とは，幼児を取り巻く園内外の事象すべてがそれにあたる．特に「自然と触れ合う中での様々な事象に興味や関心を持つ」という観点と現在の学生を照らし合わせて見ると，自然と関わった実体験の少ない現在の学生にとって，「自然と触れ合う」の自然とは具体的にどのようなもので，それをどのように遊び（幼児期の教育）に展開するのか，そのために，乳幼児の保育に関わる保育士・幼稚園教諭（以下，保育者[注1]とする）はどのような環境の構成をするのか等をイメージすることが難しい．このことは川邉氏も「保育者が体験していないことや，保育者が大事に思えないことは目にとまらない．したがって，保育者自身が，生活の中で自然や人とも出会いを楽しみ，かかわりを広げ，保育者自身の体験を広げていくことが子どもの体験を広げる上で大切なことである」[4] と述べている．実際，本学学生の様子からも，幼児期に身近な自然に触れて遊んだ経験や，草花や木の実などを遊びに活用した体験が少なく，その体験不足も指導計画立案が難しいと感じる一因となっているのではないかと考える．

このことから，全 1・2 回生が合同で通年受講する「ゼミナール」，「総合演習」の「自然と遊びフィールド」及び 1 回生後期に受講する「保育『環境』」授業で，本学構内や周辺の豊かな自然環境を活用した遊びの学習体験をした後で，指導計画の立案や環境構成を組み立てる授業を行った．本稿では，この「体験」と「立案」を結び付けた授業の組み立てにより，学生が体験に基づいた指導計画立案をできることにつながり，効果的な学習に役立つのではないかと考え検討した結果を報告する．

2. 実践内容

2-1 授業の概要

(1)「ゼミナール」「総合演習」

本学地域こども学科においては，幼児教育現場での専門性を育成するため，得意を活かせるフィールドが 6 フィールド[注 2)] あり，1 回生の「ゼミナール」，2 回生の「総合演習」の中で，学生はフィールド選択をして履修している．本稿で扱うフィールドは，そのうちの「自然と遊びフィールド」である．このフィールドでは，幼児の「身近な環境」としての自然を理解し，幼児教育に展開していくために，幼児の身近な環境となりうる植物（草花）を学生自ら栽培することを体験した．また，その体験から，幼児の興味関心をどのように引き出し，遊び（幼児教育）に展開していくかを考えた．さらに，栽培した草花や身近な植物（自然物）を活用した遊びを自分自身が実体験することにより，遊びの面白さ，発見の感動などを実感することで，その体験が幼児教育現場における実践力の養成となることを目的とした．

年度：2020 年度前期「ゼミナール」「総合演習」授業

履修学生数：5 名

(2)「保育内容『環境』」

「自然と遊びフィールド」での授業内容や受講生の反応や気づきなどを授業で紹介したり，参考資料として活用したりしながら，幼児の「身近な環境」としての自然ついて考える授業を 2 回にわたって実施した．また，授業内で木の実の採取など実際に学生が自然に触れ，五感を通して感じたこと気づいたことを指導計画の立案に結び付け，幼児の発達段階に応じた具体的な指導計画立案に取り組むことができるようになることを目的とした．

年度：2020 年度後期「保育内容『環境』」

履修学生数：74 名

2-2 倫理的配慮

「ゼミナール」,「総合演習」,「保育内容『環境』」のそれぞれ授業内で提出された課題や，アンケート結果については，授業改善と研究のみに使用し，その際には個人情報について開示されないことを口頭で説明している．

2-3 実践 1 自然とあそびフィールド：草花の栽培から遊びへの展開

(1) 草花の栽培

①栽培草花の選択（表 1）

以下のことを条件として幼児が栽培するのに適した草花を学生が 5 種類選択した．

- 幼児が管理しやすい（育てやすい）
- 様々な遊びや教材として活用できる
- 栽培の過程を楽しみ，興味をもって観察できる

表 1　選択した草花

・アサガオ
・ヒマワリ
・オシロイバナ
・タデアイ
・フウセンカズラ

②栽培活動

栽培する草花別に種のまき方や栽培方法を調べ，種をまいた．まくときには種の形や色の観察や，発芽後の成長を観察し，成長に合わせて支柱やネットの設置をした．花や葉を活用した後も栽培を続け，10 月中旬にできた種を収穫した．

③幼児の興味関心を向けるための環境構成

幼児の興味を引くようなネームプレートの作成や栽培している草花の成長を写真や

図 1　ドキュメンテーション

図 2 草花から色を絞り出す

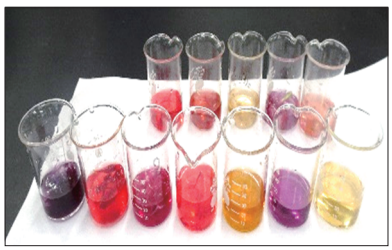


図 3　できあがった色水

イラスト，文字を使って記録するドキュメンテーションを作成した（図 1）．ドキュメンテーションとは，保育の過程を記録する方法の一つで写真や動画など多様なメディアを使って活動を捉え，それをまとめることで，保育者，保護者，幼児が活動内容を共有し振り返ることができるツールである．今回学生自身がおこなった栽培活動を園での活動に見立て，幼児や保護者に知らせることを想定して作成した．

(2) 色水遊びへの展開

①活動のねらいや環境構成を考える

自然に親しむ遊びへの展開例として，水に色々な色をつけて楽しむ「色水遊び」を今回は，色を草花から絞り出してつけることにした．まずは対象となる幼児の年齢を考え自分たちが栽培している草花や構内で栽培されている草花の中から色を絞り出せそうな材料を選択したり，必要な準備物を考えたりと環境構成について意見を出し合った．

表 2　学生が考えた環境構成

対象年齢	5 歳児
準備物	机・透明の容器（色がよく見える） タライ（水を入れる）ペットボトル・漏斗・すり鉢・すりこ木・ごみ入れ
草花	オシロイバナ・アサガオ・シソ・青ジソ・松葉ボタン・グラジオラス・タデアイ（葉）
場所	水が使いやすい場 暑さ対策（日陰・パラソルなど準備）

②色水遊びの体験

まずは，事前に考えた環境構成に従って遊びを始めるための準備した．次に用意した草花から色水を作り出した（図 2・図 3）．この活動を通して，学生は花の種類による色の違いや色の出しやすさ，微妙な色の違いに気づき，学生同士で歓声を上げたり，共感したり，感動したりしてこの遊びを楽しんでいる姿が見られた．

また，準備した道具の使い方や花を絞るときの指の使い方から，活動の対象となる幼児の年齢のことが話題となるなど，学生同士が会話する中で学びを深めている様子が多くみられた．

「色水遊び」での学生の気づきは，以下のとおりである．

・水と材料の草花の量によって色水の濃さが変わる
・手で草花を絞る，道具を使って色を出すのは，3 歳児では無理があり 4，5 歳児に適している．
・花の種類によって色の出やすいものと出にくいものがある．
・時間の経過とともに色水の色が変化する場合がある．（赤ジソ）
・遊びの場の設定として，水の使いやすさ，暑さ対策に配慮する必要がある．

(2) タデアイのたたき染めへの展開

本来，藍染に使われる染料にするためには，タデアイに含まれる色の成分が水に溶けにくいため，葉を発酵させるなどの手間がかかるが，タデアイの葉をそのまま布に挟んでたたくことで葉に含まれる色成分を簡単に写しとることができるたたき染めを，自分たちが栽培したタデアイを使って体験した．

①活動のねらいや環境構成を考える

たたき染めの方法を調べ，たたき染めをすることで，　布に色がつくことや自分で模様を考える楽しさを味わうことを活動の「ねらい」とした．また，環境構成（準備物）を収穫したタデアイの葉・金槌・布（白いハンカチ）・新聞紙・紙・雑巾・石鹸と考えた．

図 4　たたき染め様子

図　5　乾燥させているたたき染め

②たたき染めの体験（図 4・図 5）

体験当日，学生は自分が育てた新鮮なタデアイの葉を収穫した．机の上に新聞紙，紙を敷きその上に白いハンカチ置き，葉っぱの配置やデザインを考えた．デザインを決めた後，布を折り返して葉っぱを挟み込み，緩衝材として新聞紙を敷いて金槌でたたいた．途中布をひっくり返したり，色の出方を確認したりしながら制作した．たたき終わった後，しばらく放置し水洗いをして葉っぱを取り除き，乾かして完成させた．作業中は，他の学生のデザインや色の出方などを見て，お互いによい所を認め合っている様子が見られた．

「タデアイのたたき染め」での学生の気づきは，以下のとおりである．

- 金槌でアイの葉を根気よくたたく必要があるので，3，4 歳児には適さない活動である．5 歳児が行う際にも保護者と一緒に活動するなど大人の援助が必要であり，安全面での配慮が必要である．
- 葉の配置の仕方や葉の大きさの選び方により，デザイン遊びとしても楽しむことができる．個々の幼児の個性やアイデアを大切に認めていきたい．
- たたき染めの後，十分に乾かすことで染めた色がはっきりと出たので，活動の時間の配分についても配慮していかなければならない．

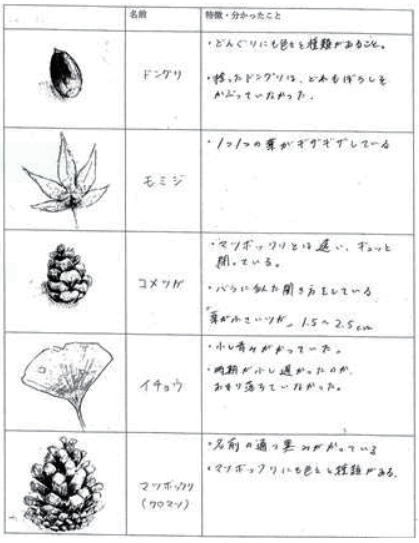
2-4 実践 2 保育内容『環境』: 身近な自然環境の活用　～秋の自然物を活用して～

学生が子どもの目線に立ち，身近な秋の自然に目を向け，木の実や落ち葉を採取し，その名前などを調べ，それを使って子どもの遊びがどのように展開できるのかを考え，指導計画を立案する内容とした．「ゼミナール」および，「総合演習」の授業で秋の自然環境を活用した遊びを体験学習した際の学生の反応や気づきも紹介し，採取する際の注意点として，木の実のなっている樹木や葉など周りの環境も観察することを伝えた．その後，学生が実際に大学構内や護国神社内を散策し，身近な自然に触れ，木の実や木の葉などを採取した．教室に戻ってからは，グループで採取した自然物を観察し，名前や特徴を調べた．そして，その体験をもとに自然物を使った制作活動に展開していく指導計画の作成を行った．

(1) 秋の自然を見つける体験

①グループに分かれ，大学構内，護国神社で「秋」と感じるものを見つけ採取する．

学生が見つけた自然物は次のとおりである．ドングリ（クヌギ・カシ・スダジイ・ブナ）・マツボックリ（アカマツ・スギ・メタセコイヤ）・ノイバラ・ハナミズキ・ツバキ・落ち葉（サクラ・ホウノキ・イチョウ・メタセコイヤ・ケヤキ・カキ）



	名前	特徴・分かったこと
	ドングリ	・どんぐりにも色々な種類があること。 ・特にドングリは、どれもぼうしをかぶっていたかった。
	モミジ	・1つ1つの葉がギザギザしてる
	コメツガ	・マツボックリとは違い、ぎゅっと閉じている。 ・バラバラに広がっている 葉がトゲトゲ。1.5～2.5cm
	イチョウ	・小さい葉がかわいかった。 ・時期が少し遅かったので、おちり落ちていたかった。
	マツボックリ（クロマツ）	・名前の通り葉っぱがとがっている ・マツボックリにも色々な種類がある。

図 6　調査表

②自然物の名前を調べる（図 6）.

見つけた自然物を絵に描き，図鑑等を使って名前と特徴や調べてわかったことを書き込んだ調査票を作成した.

「秋の自然を見つける体験」での学生の気づきは，以下のとおりである.

- 落ちているドングリは気づいていたが，実際に探しに行くことで，木についているドングリにも気づくことができた.
- ドングリに帽子（殻斗）があることに気づいた．また，それがドングリによってそれぞれ違っていることに気づいた.
- 木の実の名前を調べるためには，葉や樹木も観察しておかないとわからない.
- 今まで気づかなかったが，自分たちの身の周りには，たくさんの種類の木の実があることが分かった.

(2) 秋の自然物を使った遊び～ウェビング[5]の手法を用いて～

①ウェビングする

見つけた自然物からどのような制作に展開できるかを連想したキーワードをつなげて図式化するウェビングの手法を用いて考えた（図 7）.

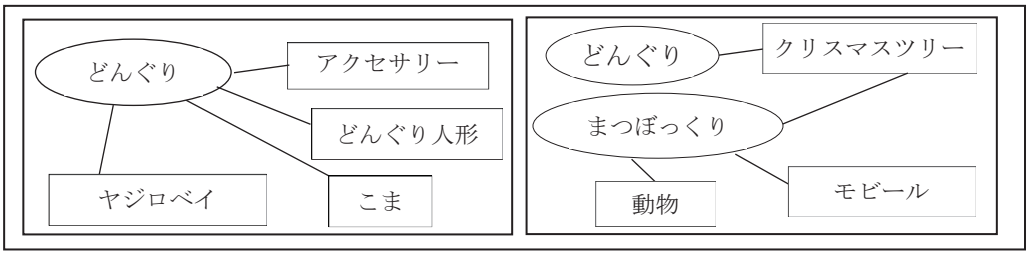


図 7　自然物を活用ウェビング図[5]

② 秋の自然物を使った制作活動

ウェビングで意見が上がった制作物は下記のとおりである.

- 貼り絵
- スノードーム（図 8）
- 段ボールを使ったリース
- クリスマスツリー
- ヤジロベイ（図 9）

図 8 スノードーム

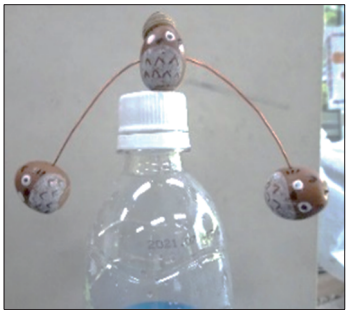


図 9　ヤジロベイ

学生は，自分たちで参考になる本を探し，制作するものを決め，材料・用具などを集め，準備を進めた.

また，制作中には幼児が制作するには，材料をどの程度まで加工しておくか，接着するためには，何が適しているのかなど，幼児の目線に立って試行錯誤している姿があった.

「秋の自然物を使った遊び」での学生の気づきは，以下のとおりである.

(3) 指導計画の立案

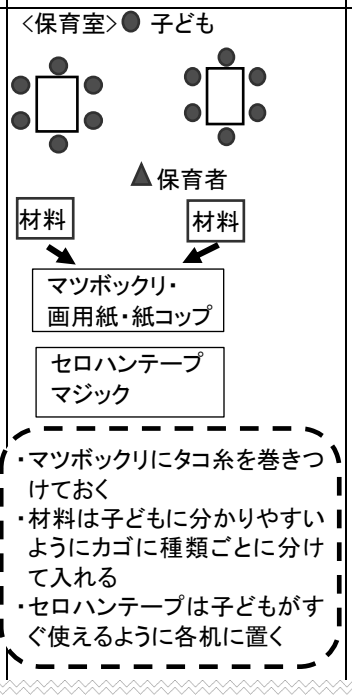
- 制作する楽しさを感じた.
- 材料の準備や環境の構成の大切さを感じた.
- 自分が拾ったものが，作品になると嬉しい.
- 様々な方法で，自然物を使った遊びを調べたところ，多くの遊びがあり様々な制作活動に展開できることに気づいた.

（1）（2）の体験をもとに次の手順で自然物を使った制作をする指導計画を立案した．①対象年齢，クラスの人数を設定する②活動を設定する③ねらいを設定する④活動の時間配分を考える（導入，説明，片付けの時間も含む）⑤自然物の材料（数量も合わせて考える）を考える⑥その他の材料，準備物（のり，ボンド，竹ひご等）を考える．

表 3 は，学生が立案した指導計画の一部である．これを見ると，環境の構成の部分では，単なる材料の羅列だけではなく，点線で囲った部分のように「マツボックリにタコ糸を巻きつけておく」や「カゴに種類ごとに分けて入れる」など，その材料をどのように準備しておくかが詳しく書けるようになった．同じく幼児の活動の部分でも，点線で囲った部分のように細かい作り方を記入することができるようになった．

表 3　「マツボックリけん玉」を作る　　4 歳児　11 月（学生の指導計画より一部抜粋）

指導案（4 歳児　11 月）

時間	環境の構成	予想される幼児の活動	保育者の留意点
9:00		○保育者の説明を聞く ・椅子に座る ○「マツボックリけん玉」を作る ・マツボックリに巻き付けられたタコ糸を紙コップの中底にセロハンテープで張り付ける ・マジックや画用紙で紙コップを飾り付ける ・出来上がったけん玉で遊ぶ	・幼児が興味をもつように「マツボックリけん玉」の見本を見せて説明をする ・子どもの前でゆっくり丁寧に作りながら説明をする ・子どもに聞こえるような声の大きさで話す ・できない子どもには個別に援助する ・セロハンテープが外れないように何度も重ねて貼るように声を掛ける ・「どんな飾り方がいいかな」と子どもの飾りをつけたくなるような声を掛ける ・一人一人にできた作品を褒めて、制作の楽しさを感じられるようにする ・保育者も一緒に「マツボックリけん玉」で遊び子どもと楽しむ

3. 考察

前章で述べたように，それぞれ体験後に振り返りの時間を設け，受講生に気づいたことを発表してもらった．詳しい内容については前章に四角で囲んで記した．気づきや体験中の様子から受講生がどのような点に注目して，実際にこの活動を幼児教育の現場で実施するときに注意することなどを学んでいるかを考察していく．

3-1 自然とあそびフィールドでの体験学習を実施して

まず，「色水遊び」を体験しての気づきとして「手で草花を絞る，道具を使って色を出すには，3 歳児では無理があり 4，5 歳児に適している」「遊びの場の設定として，水の使いやすさ，暑さ対策に配慮する必要がある」等，遊びに使用する道具や材料の種類，それを使用するときの難易度や対象年齢について具体的に自ら考察することができるようになったことがうかがえる．このことは指導計画を立てる上でとても重要なことである．

次に「たたき染め」では，受講生全員が初めて体験することであったため，自分たちが育てた「タデアイ」から「たたき染め」ができることに驚いていた．また，できた作品に一人一人それぞれの個性があり，他の人の作品を見ることで，多様なデザインや色の違いなどを感じることができ，この活動の楽しみ方を知ることができたことが受講生の様子からわか

った．気づきの中では，「金槌でアイの葉を根気よくたたく必要があるので，3，4 歳児には適さない活動である．5 歳児が行う際にも保護者と一緒に活動するなど大人の援助が必要であり，安全面での配慮が必要である．」等，実際に幼児と一緒に活動する時の配慮点や手順なども理解できていることがわかる．さらに「幼児の個性やアイデアを大切に認めていきたい」という意見から，「領域『環境』」の内容の取扱いに示されている「他の幼児の考えなどに触れ新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わう」[6] を実践するための保育者の関わり方も理解できていると考えられる．

草花の栽培活動は，発芽から種ができるまでという長期間の観察を行う中で，「アサガオ」「オシロイバナ」「タデアイ」等の種から育てた植物の発芽，開花時に学生が感動する姿や，とりわけ，種の収穫をした際に「植えた種と同じ種が穫れた」「生命は循環するのだ」と学生が感動する姿を目の当たりにし，この学習体験は，保育者として子どもが自然と関わる楽しさや大切さ理解するうえで重要な体験となったのではないかと筆者は考える．

また，草花の栽培から，それを使った遊びへ展開していく活動の中で，座学では得られない学びを得ることができた．受講生は，感動や喜び，楽しさ，面白さを実際に味わったことで，この活動を実際に幼児と行う時に予想される幼児の行動や幼児が興味関心をもつポイントをイメージすることができるようになっていき，指導計画の立案や環境構成についてより具体的に考えられるようになってきたことがうかがえる．

3-2「保育内容『環境』」での体験学習を実施して

大人よりも視野が狭い幼児は，環境の様々な変化に気づきにくいことも多くある．また語彙の習得が不十分であるため，それを表す言葉をもたないこともある．保育者自らが環境の変化に対して感性を豊かに保ち，自然とその変化のすばらしさに感動する気持ちをもつことで，子どもたちは，保育者の発する言葉や変化に対する感情表現から，周囲の環境変化に興味関心を向けることにつながる．このように，保育者が身近な環境に興味関心をもって行動することが，「領域『環境』」のねらいに示された教育活動をするためには必要不可欠である．

本学は，都会の大学とは違い，大学構内に農園や多くの樹木あり，また，道路を挟んだ向かい側の「護国神社」には「高円の杜」として昔からの自然が残されている自然豊かな場所にあるにもかかわらず，学生は季節による木々の変化や木の実に気づかずに通り過ぎていることが多いと筆者は感じている．これも学生自身が「自然と触れ合う」体験が不足しており，気づきが足りないからだと考え，「保育内容『環境』」の授業で，「子どもを取り巻く自然環境」として体験学習を取り入れた．

「保育内容『環境』」で実施した体験学習の気づきでは，「今まで気づかなかったが，自分たちの身の周りには，たくさんの種類の木の実があることが分かった」等，受講生が今まで気づかなかった身の周りに多くの自然環境があることに気づいた様子がわかる．また「落ちているドングリは気づいていたが，実際に探しに行くことで，木についているドングリにも気づくことができた」「ドングリに帽子（殻斗）があることに気づいた．また，それがドングリによってそれぞれ違っていることに気づいた．」等，見つけたものの名前や特徴を調べたことで，ただ拾い集めるよりも，深く心にとめることができたのではないかと考えられる．採取した自然物を使った遊びを考え，発表することにより，他の学生からも情報を得ることができ，秋の自然物を使った多くの遊びを知る機会になった．

また，受講生は，実際に作品を作る中で，「様々な方法で，自然物を使った遊びを調べたところ，多くの遊びがあり様々な制作活動に展開できることに気づいた」等，子どもが制作活動を行う際の環境の構成や自然物以外の準備物についても，気づきがあったことがうかがえる．また，作業の難易度についても実際に自分たちで作ることで理解し，この活動が楽しめる幼児の年齢や保育者の必要な援助についても理解したことがわかる．

3-3 指導計画の立案

実際に体験した後の指導計画立案であるため，その活動を通して予想される幼児の行動や保育者がすべき援助，環境の構成についてもイメージしやすかったようである．1 回生前

期に履修した「カリキュラム論」で，長期・短期のカリキュラムについて学習し，実際に幼児の年齢別に指導計画の立案も行ったが，その時には，活動の欄には，遊びの名称を記述するのみで，具体的にどのように遊ぶのかについて，ほとんど記述できなかった．また，その遊びをするための環境の構成（材料・用具）についても記述が少なく，机や道具・材料の配置の記入が中心で，例えば，遊びに必要な水の確保はどうするのか，そのために遊びの場所はどこに設定するのか等の遊びを実行するための具体性に欠ける記述であった．その時と比べると表 1 で例に出した指導計画のように幼児の予想される活動や環境の構成について具体的に詳しく記入することができるようになった．

指導計画の立案は，幼児の学びを保証していくために必要不可欠なことである．保育者は，幼児の興味・関心を理解しながら，育てたい力，育とうとしている力を活動の「ねらい」としてもち，長期短期の指導計画作成をしていかなければならない．そのために，保育者は，幼児の年齢や，発達の段階を理解するとともに，幼児の興味や関心，遊びの展開や幼児の姿を予測する必要がある．幼児と関わる経験が少ない学生にとっては，幼児の活動や展開を予想しての指導計画作成は難しいことではあるが，保育者自身が活動内容を十分理解することで幼児の気持ちを推し量ることができるようになり，遊びの展開を創造したりすることにつながるとわかった．

以上のことから，保育者を目指す学生は，実体験を通して，学生自身が，感動したり，楽しんだりすることにより，幼児にとって「身近な環境」が興味を惹かれる環境であることを理解することが必要であるとわかる．

それとともに，学生が遊ぶ楽しさや多様な遊びの展開を知ることにより，保育者に必要な体験を多く積むことは，子どもにとって，保育者が遊びの共感者，共同作業者[注3)]としての役割をはたすことができる力をもつことにつながると言える．

4. まとめ

幼児は「周囲の様々な環境に好奇心や探求心を持って関りそれらを生活に取り入れていこうとする力を養う」必要がある．「身近な環境」としての「自然」との出会いや触れ合いを通して，その不思議さや関わる喜びの感情を体験し，それが豊かな感情や好奇心を育み，思考力や表現力の基礎を形成していく．その時保育者が適切な関りをすることで，幼児は刺激を受け今まで関心がなかったものや自分とは違う考えや物について目を向け考えることができるようになる．そのため，保育者自身も自分を取り巻く環境に目を向け，変化を敏感に感じ，共感できる豊かな感性をもつことが求められる．

今回，著者は自然と関わった遊びを受講生に体験させて，「保育内容『環境』」，「ゼミナール」，「総合演習」などの授業で，指導計画の立案に取り組んだ．体験後にはイメージしやすくなり計画がより具体的に立案できるようになっていることを目の当たりにした．今後も，幼児の発達や幼児理解など保育者として必要な知識や理論の習得とともに体験を通しての学びを大切にした授業を実践していきたい．

注釈

1) 保育者とは，「幼稚園や保育所で直接子どもの保育にたずさわるものについての共通の働きに共通した言葉」[7)]である．本学においては，保育士・幼稚園教諭の養成を行っていることも踏まえて，幼稚園教諭・保育士を指す言葉として保育者と表記する．

2) 本学地域こども学科では，幼児教育現場での専門性を育成するため，得意を活かせるフィールドとして，「自然と遊び」「音楽」「表現」「心と発達」「スポーツ」「保育ソーシャル」6 フィード制を設けている．「保育ソーシャル」を除く 5 フィールドでは，多くの学生が幼稚園教諭と保育士資格の両免許取得を目指しており，複数の科目で補完しながら学びを深めている．2019 年度は，1 回生の「ゼミナール」・2 回生の「総合演習」が保育士資格の必修履修として，各フィールド別に 1，2 回生合同の授業を実施した．

3)「幼稚園教育要領」には，教師の役割として，「幼児の主体的な活動を促すためには，教

師が多様な関わりをもつことが必要であることを踏まえ，教師は，理解者，共同作業者など様々な役割を果たし，幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう，活動の場面に応じて，適切な指導を行うようにすること。」[8] とある．

引用・参考文献

1）文部科学省：『幼稚園教育要領解説　平成 30 年 3 月』，フレーベル館，p.28（2018）
2）文部科学省：『幼稚園教育要領　平成 29 年告示』，フレーベル館，p.9（2017）
3）2）と同書，p.10
4）東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編：『今日から明日へつながる保育：体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論』，萌文書林，p.83（2009）
5）田宮緑：「06「身近なもの」を使って何が作れるかな？」，『体験する・調べる・考える 領域「環境」』，萌文書林，p.117（2018）
6）2）と同書，p.18
7）森上史郎，柏女霊峰編：『保育用語辞典　第 8 版』，ミネルヴァ書房，p.182（2015）
8）1）と同書，p.116